



白滝へ向かう林道沿いにて (10月31日)

慧 光

金光寺寺報
第149号
発行所 金光寺
宮崎県西臼杵郡
五ヶ瀬町大字鞍岡
5927番地
0982
83-2338

今月のことば

忘れても 慈悲に照らされ 南無阿弥陀仏 (浅原才市)

今月は、妙好人としてよく知られている浅原才市さんの言葉です。才市さんの多くの歌に満ちあふれているのは、「南無阿弥陀仏」にほかなりません。その歌のほとんどは「南無阿弥陀仏」か「ご恩うれしや 南無阿弥陀仏」で結ばれています。それは、才市さんが称えるよるこびあふれるお念仏であることは言うまでもありませんが、南無阿弥陀仏そのものが才市さんの上にいきいきとはたらいっている躍動感あふれる姿と言えるでしょう。

才市さんは、いま現にこのわが身に届いてはたらきつつあるもの、わが身を揺り動かし目覚めしめつつあるものを、南無阿弥陀仏といただいたのです。それは私からのアプローチではなく、徹底して仏さまの側からのほたらきかけです。私が理解したから、私がつかんでいるから、私が思っ

ているから、ということではありません。それはみな私が前提となっています。いつの間にか、私を確かなものとしているのです。私が理解したから間違いがないと、私を確かさの根拠にするのではなく、不確かな私を救わずにおれないという南無阿弥陀仏の救いにおまかせしたのです。

私が阿弥陀さまのお慈悲を思っている時間など、たかが知れています。思い起こすどころか、忘れっぱなしです。思い出しても、すぐに忘れてしまいます。阿弥陀さまが先にはたらきだして、私が照らし出され、教えられて、私が忘れても、忘れられないとはたらき続ける親さまがすでに私の声となって、南無阿弥陀仏と名告りをあげてくださるのです。

(本願寺出版社刊「大乘」誌より転載)

金光寺よろずコーナー



9月29日、木村和史・明菜さんご夫妻の娘さん 星華ちゃん(8月27日誕生)の初参式をつとめました。健やかなるご成長を!

仏事お休みのお知らせ

下記の日は緊急を除き、仏事を行いません。

- 2013年12月 24日 宮崎出張(教学勉強会)
- 2014年 2月 7日~9日 京都出張
- 10日~11日 私用(入試)
- 24日~26日 私用(入試)

ホームページ開いています。
URL <http://konkhoji.jp>
11月5日現在 アクセス数 61,346人

仏教用語豆辞典

沙汰

「ご無沙汰しています」
何気なく使っている言葉ですが、「沙汰」とはどんな意味かご存知ですか。
『広辞苑』を見ると 淘汰
評定、裁断、訴訟 事務の
裁断処理 処置、取り扱い

主君や官府の指令 たより、音信 評判 行い、しわざ、事件、と数多くの意味がありました。
「地獄の沙汰も金次第」は、「追って沙汰する」は、「正気の沙汰」は、「ご無沙汰」はの意味になります。
この「沙汰」の出典は仏典だといえます。
『仏教語大辞典』には「揀択遺棄の意。排斥。沙金を淘汰して沙を捨て金をとることで、不用のものを去り、有用のものを吟味のこと」とし、いくつ

かの仏典を示しています。そしてさらに、唐の武帝が考試によって僧をしらべ、真に僧たる学力を有する者以外は還俗させた会昌の排仏を会昌沙汰というところ介しています。
本来は選択淘汰の意味ですが、金あまり現象の日本ですが、本場に「地獄の沙汰」は金次第ですかね。

(本願寺出版社発行
辻本敬順著
「仏教用語豆辞典」一〇〇
パート「から」)

住職ひとりごと

十月に行われた山頭火フォーラムは天候に恵まれませんでした。二日間とも法事があつて行けませんでした。フォーラムに参加された曾我部房子さんと法事で会う機会があり、山頭火の話少し聞くことができました。次の句を教えていただきありがとうございました。死ねばかりのイナゴを草に放つ。柿の種を火の中に入れてはいけません。と聞きました。どちらも意味深く、私のような者にはとて理解することはできません。が、房子さん曰く、いずれも命を大切にしなければなりません。この教えだと受け留めてまいらぬことでした。確かにいずれも死にしかたない。イナゴでも柿の種も入れればそこで役目は終わるけれど、土に返せば、やがて芽が出て次の命が育つかもしれない。ありがたい教えです。フォーラムには行けませんが、最後の法事でした。(住職 松井卓郎)

疑心あることなし

十月十五日から秋参りを始めました。また、今月二日からは恩講も始まりました。十二月、当山の報恩講に向けて本格的なお参りの時期になります。

お参りに際しては、二〇一四(平成二六)年の法語カレンダー、報恩講の施本と明年お迎えをする年回忌案内を配っています。一応、右上に明年の一周忌

から五十回忌までの該当年を揭示しておきます。ご確認ください。

さて、年回忌と言えば、十月は年回忌のお参りが多い月でした。土曜・日曜日には二軒の法事というのが当たり前のようになり、尊いご縁をたくさんいただきます。

そんなご法事の中、十月五日は三回忌のご縁がご自宅で営まれ、送迎をしていただきました。迎えに来ていただき、早速、助手席に座ると運転手の方が

「しばらく運転してないので、ご注意ください」とおっしゃいます。そう言われても注意しようがありません。だって、助手席にはブレーキペダルもハンドルもないのですから！運転手に分からないように両足

2014(平成26)年の年回忌案内

- 1 周忌 (2013年・平成25年の物故者)
- 3 回忌 (2012年・平成24年の物故者)
- 7 回忌 (2008年・平成19年の物故者)
- 13 回忌 (2001年・平成13年の物故者)
- 17 回忌 (1998年・平成9年の物故者)
- 25 回忌 (1990年・平成2年の物故者)
- 33 回忌 (1982年・昭和56年の物故者)
- 50 回忌 (1965年・昭和40年の物故者)

となつています。明年の年回忌のご案内は本年中にはお届けしますが、一応お位牌、過去帳等でご確認ください。

を突っ張り、ご自宅まで送っていただきました。運転手の技術を疑っての行動でしたが、無意味なことでしたね。

『仏説無量寿経』下巻に「無量寿仏の名を聞いて信じ喜び、わずか一回でも仏を念じて、心からその功德をもつて無量寿仏の国に生まれたいと願う人々は、みな往生することができ、不退転の位に至るのである。」

とあります。親鸞聖人はその「名を聞く」の聞くということについてご著作の中で『無量寿経』に「聞」と説かれていたのは、わたしたち衆生が、仏願の生起本末を聞いて、疑いの心がないのを聞いているのである。とお示しくさせていただきます。



聞くということは仏が衆生救済の願をおこされた由来と、その願を成就して現に我々を救済しつつあることをうかがって疑いの心があつてはならないので

私たちが阿弥陀さまの本願他力のはたらきをいただいて救われるためには疑心(疑いの心)があつてはならない、疑いを持つて自分の心に蓋をしまつと、せつかくこの身に至り届いていない阿弥陀さまの私たちに對する救済のお慈悲がはたらかなくなるのです。

お迎えの車を此岸から彼岸へと渡してくださる弥陀弘誓の船(本願他力)だとすれば、疑いの心を持った私は乗ることができなかつたと思います。

自力修善を離れ、本願他力であれば救われぬ身であること、そして、阿弥陀さまからいただく信心には疑いの心がまじることではないということに改めて気づかせていただいたありがたいご縁でした。

最後にお迎えの方の運転は確かなものでした。

法語の世界

原文

一心とは、弥陀をたのめば如来の仏心とひとつになしたまふがゆゑに、一心といへり。

(蓮如上人御一代記聞書 百六十一)

現代語訳

一心というのは、凡夫が弥陀を信じておまかせするとき、仏の不思議なお力によって、凡夫の心を仏の心と一つにしてくださるから一心というのである。

二〇一三(平成二五)年 金光寺報恩講のお知らせ

日時

- 十二月十五日 午前十時〜 日中法要(上下参り)
(九区・十三区・十四区地区) 午後七時〜 速夜法要(お番)
- 十二月十六日 午前十時〜 日中法要(中央参り)
(十区・十一区・十二区)

講師

- 備後教区 三谿組 善徳寺住職 浄土真宗 本願寺派 布教使 長谷川 憲 章 師

その他

お参りの際は、門徒式章、念珠と聖典(お経本)をご持参ください。報恩講期間中の日中法要(午前十時からの法要)にお仕事等でお参りできない方は、十二月十五日午後七時からの速夜法要にお参りください。

報恩講は、親鸞聖人のご命日を縁として、一年に一度、浄土真宗の門信徒が阿弥陀さまのみ教えに出遇わさせていただく、**浄土真宗では一番重要な法座です。**是非、ご勝縁をお結びください。